

Title	時よとまれ, 君は美しいか?: 制度批判と慶應義塾を生きる
Sub Title	Stay a while! you are so beautiful? : criticism of the institution and living in Keio
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2025
Jtitle	哲學 (Philosophy). No.154 (2025. 3) ,p.1- 47
JaLC DOI	
Abstract	A review of my activities at Keio University. It was to critique institutional life and to experiment and lead the way in a way that would be in keeping with the culture of Keio University. I was moved by the people I met at the university, and my life was a search for new arts of life with them.
Notes	特集: 岡原正幸君・岡田あおい君・三尾裕子君退職記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000154-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

時よとまれ、君は美しいか？

——制度批判と慶應義塾を生きる——

岡 原 正 幸*

Stay a while! You are so beautiful? Criticism of the Institution and Living in Keio

Masayuki Okahara

A review of my activities at Keio University. It was to critique institutional life and to experiment and lead the way in a way that would be in keeping with the culture of Keio University. I was moved by the people I met at the university, and my life was a search for new arts of life with them.

皆さんに心から感謝いたします。退職にあたってこういった機会を得て、仲間と共に自分自身について考える、幸福な時間が手に入りました。

う～ん、末部に敢えて付した文献抜粋リストをご覧になれば、僕自身の仕事のバラバラさに驚かれるかと思います。学位も修士号まで。狭い業界では、感情社会学、障害学、アートベース・リサーチなどが僕の代名詞になりますが、ここではそれら「研究歴」に限定せず、こういった活動をも見渡す地点を提案しようと思います。それは制度批判と慶應義塾です。

* 慶應義塾大学名誉教授

時よとまれ、君は美しいか？

1. はじめに 慶應義塾の一員となり

1970年に義塾の一貫校の一つ、慶應義塾普通部に入学します。高校時代にバレーボール部の主将だった母親は、慶應ボーイの臨時コーチにトキメキ、息子は慶應と決めたそうです。ちなみに件の学生コーチとは松平康隆さん、1972年ミュンヘン五輪での金メダル監督ですね。そう思うと母のおかげで、2023年春に定年を迎えるまで52年間ずっと慶應です。世田谷区立の小学校と留学先を除けば、全部慶應です。他大での教歴も非常勤講師の一件だけ（お世話になった先生の依頼でした）、ほぼ慶應です。

慶應義塾の理念や方針を得意げにここで繰り返そうとは思いません。むしろ僕は義塾に巣食う何やら蠢く、独特の雰囲気嫌いでもありました。いや、嘘だろう、とお思いでしょうが、本当です。風の通しがいいようで悪い、男社会なのも嫌いでした。男子校で中学高校と楽しく過ごしただろうと言われれば、そうかもしれません。たとえば、1972年札幌五輪の翌年からウィンタースポーツの世界大会が日本で行われるようになり、苗場のスキーワールドカップでは、僕たち普通部生数名は、選手の出迎えに夜9時ごろ羽田に行き、NHKのニュース番組で当時のチャンピオンにサインしてもらい姿が紹介され、挙げ句の果ては、選手移動用のバスに勝手に乗り込んでサインをいただくという自由気まま。翌日、国鉄の順法闘争で3倍以上時間がかかる上越線で越後湯沢に雪の深夜に到着。優しい地元の人に助けられて苗場の宿に深夜12時回っての到着、といった冒険譚もあります。

でももちろん、自由な気風、というか自分で何でもやれ！自分の他（上にも下にも）に頼らず、自分の他（上にも下にも）に任さず、動かさず、とっとと遠慮なく自分でやって仕舞えばいい！この気風を浴びてきたのは確かです。普通部に入学してみたら、先生の口から出るのは、こんな感じでした。

・新学期ですね、いい天気です。教室の外に出ましょう！

- ・ 文部省の教科書，僕も一緒に書いているけど，そんな教科書使っても面白くないよ！
- ・ 君たち，中学生だけど，中学生用の参考書じゃどうしようもないだろう。
- ・ この授業の試験問題はみんなに作ってもらいます。
- ・ 僕の試験に，満点なんかはないよ，どんどん書けば書くほど点が上がる。
- ・ 歴史の授業ですが，1年間かけて北条氏について話します。他は自分で学んでください。

こんな感じだと，公立小学校生活の常識は通用しないわけで，同級生も強者で，昼休みの弁当が卓上コンロを持ち込んでの調理だったり，自作絵画が三越で 10 万円（普通部の授業料換算で現在なら 25 万円程度かな）の価格で売れたり，とにかく破格。中学生の僕はせいぜいドイツ語の勉強を始めスポーツ系のドイツ語雑誌を丸善で買ったり，「スポーツイラストレイテッド」をアメリカから年間購読したりした程度でした。愛してやまない慶應ライフだったわけですが，僕が経済学部に進学した翌年の 1977 年となってすぐ慶應義塾大学には週刊誌ネタで激震が走ります。商学部不正入試事件，漏洩先が戦後の日本のフィクサーと言われ，右翼／慶應が世間的に語られるわけで，経済学部 2 年生だった僕はストライキ実行委員となり，授業が行われている各教室を回っては，塾長への団交要求やストライキの意義を語り（先導なのか煽動か），学生大会で決議後は，ロックアウトした日吉キャンパスにおける 11 日間の学生ストライキを実施しました。

さて，この件，政治ネタとして，社会学者なら社会運動論として語るべきかもしれませんが，僕にとって，その後も慶應にいて大きな影響を持ったことだけをお知らせします。学生部の方々が僕らの味方だったこと（右翼扇動車が銀杏並木に侵入したときの職員の皆さんの態度，自主講座講師として僕らがお呼びした羽仁五郎氏への誘拐脅迫電話への毅然とした態

時よとまれ、君は美しいか？

度)、体育科の先生から「頑張って、応援するよ」と励まされたこと、教室回りをしても授業を行っている先生たちから「わかりました、どのくらいの時間が必要ですか？ 15分？ 30分？」と受け入れてもらった事などです。全共闘世代でもなく、もはや一部の大学を除いてパーセでもあった学生ストライキをするにあたり、世間からは否定感情が向けられるはずだという勝手な僕の予想も、単なる規範意識に基づいた、つまり、社会学的に言えば、制度的な反応だったこととなります。

そこに既にあるもの（枠、仕組み、制度、今風にいえばアンコンシャス・バイアスもその一つか）を批判し、別のものを作るという制度批判の魂は、こうして、慶應義塾という文化より僕の中に植え込まれたと言わざるを得ません。もう少し緩やかに言えば、僕の天性のキャラにヴィヴィッドに触れた慶應義塾の文化が、多々ある中でも、制度批判という文脈で際立ったということだったのでしょう。福澤先生の言葉は数多ありますが、僕の気持ちを鷲掴みにした言葉は、全て、制度批判そのものだったのでと今なら思えます。「鯨飲」もある意味、制度批判のパフォーマンスではないでしょうか笑笑。

かくして、僕にとって、慶應義塾で生きることは、その隅々まで、いかに制度批判の眼差しを向けるかということに等しくなりました。

2. 制度批判のパフォーマンス

さて、では、どの程度の制度批判なのか皆さんにわかってもらえるように、慶應義塾で授業を担当するようになっての僕の日々の実践をいくつか紹介しましょう。

Network C.I. という試み 助手になったばかり、社会学専攻の藤田先生が留学ということで、藤田ゼミを代講しました。合宿で「今の大学は腐っている」というゼミ生に、内心「腐った大学で食っている」と自戒していた僕は反応し、では、一緒に理想の大学（自主大学）を作ろうと動きます。

学生のネットワークは瞬間に他学部、他大学の学生も巻き込んで、自主的な講座を定期開催するコミュニティになりました（Network C.I. 1992～1994）。普通部同期の石原伸晃さんは僕が呼んだものの、科学史の米本昌平さん、大前研一事務所にいた近藤ジェームスさん、イスラエル大使館書記官など学生は次々と声かけして自主講座（謝金も無しで）を三田で夜間に開催しました。大学・学問・政治・社会・人生を真摯に問う実践でした。その時のメンバーには社会学専攻の小倉康嗣さんや、コロナ対策専門家会議で活躍した武藤香織さんがいます。ちなみに大学批判を合宿の飲み会で行った日笠賢治君は、教員としての僕を育ててくれた学生の第一号だと思っています（その後も何人も学生の僕を育ててくれました）。

授業内容 とにかく流動的、というか、目の前に現れる学生の熱量や力量、既に彼らが手にしている知識、関心、専門性に応じて、授業運営をアドホックに練り上げるのが僕の授業でした。毎年度どのような学生が姿を見せるかに大きく依存しているので、講義ノートはまず作らない、さらに執筆時期からして未知の学生たちに向けてとならざるをえないので、シラバスも作れない。代わりに、素材となる断片をいくつも紙片に用意して授業に臨む。社会学史のように既存の学説を土台にしてそれ自体を学生に伝える類であっても、ある年のように、三田の社会学の専任教員それぞれについての私の解釈に時間を割き、それら教員の仕事の中からパーソンズ、シュッツ、マルクス、ヴェーバー、デュルケイムの像を導くといったことをしました。社会学概論、社会学史も共同で担当しましたが、他に、現代社会論、生の社会学、映像社会学、感情社会学という僕のために設置された授業がありました。私が専任講師に昇任する際に、自分の授業を作りなさいと言われ、1994年から設置したのが現代社会論でした。

「現代の社会に生きている私たちの中には、すでに現代社会論がある」と言うフレーズで、参加者に制限なく自己表現（語り、ドローイング、歌、ダンスなど）をしてもらい、途中からは学生たちだけで長編ドラマ映画の

時よとまれ、君は美しいか？

作成もしました。半期制への移行に伴い、現代社会論と文化社会学を生の社会学、感情社会学、映像社会学に分けます。『生の技法』と言う書物は書いていますが、生の社会学は私の専門とは言えません。実は、小倉康嗣さんと共同担当することを前提に設置した授業です（高山真君と僕との共担を経て、今は、彼が単独でこの授業を担当しています。嬉しい限りです）。映像社会学は映像の社会学ではなく、社会学の映像化と言えいいのか、今なら ABR と言えいいのですが、とにかく映画を学生に作らせました。ある時期からは後藤一樹君やハイスありな君との共担で運営、中には『生の技法』や『地位と羞恥』（ネッケルさんの著作で私が翻訳しました）の映像化もありました。

感情社会学では、感情社会学概論のような講義には早々に興味を失い、身体表現を伴うワークショップに内容をシフトさせます。僕の頭では感情社会学が演劇制作とほぼ平行でした。共担を柏木陽さんや関根淳子さん、そして澤田唯人君にお願いしました。関根さんが提唱した当事者演劇、あるいは自分について他者が演じる作品を自分で演出する当事者演出演劇、パフォーマンスアートや応用演劇のワークも数多く行いました。コロナ禍では、こうもしました。対面接触なしでの演劇実践として、声だけのワークです。参加者には匿名（学生番号の下四桁だけで識別）で、「あのね、」で始まる語りを録音して提出してもらいます。この録音をランダムに別の参加者に届け、その参加者はその録音を聴いて、それに対する応答を録音して提出してもらいます。このやりとりを繰り返す、最後に、相手の存在をアート作品化するというゴールです。まさに ABR ですが、参加者は、声だけでのこのやりとりに大いに感動してくれました。声で身体に触れられるという体験はコロナ禍の特殊状況で「対面」の意味を再考させるものになったのです。

グループワーク（「教室は人と出会う場所」）も 1990 年より僕の授業の

基本線です。履修者が 300 名だろうが 10 名だろうが同じです。ある授業である人とある人がたまたま出会う、このパフォーマンスな出会いをいかに授業にとりいれるか、「社会学という出来事」としての授業であったら、人の出会いを物象化したくない、それを大事に考えてきただけで、いわゆる教育効果とか学習効果とかをグループ学習に求めたことはほぼありません。もちろん、僕の学生時代にも問題化していたマスプロ教育への批判だったりも個人的にはしただろうけど、人が集まることこそ、コミュニティとか、社会デザインの基本だと考えているので、折角、授業履修という契機で人が集まっているという、そのリアリティを無視したくはなかったのです。

シラバス かつては講義要綱というガイドブックで、形式も不統一な印刷物が、なぜか形式化されたシラバスとなり、どの授業も一定の枠の中で紹介されるようになりました。その時点から、僕がシラバスに書き込んでるのは次のような言葉です。

「昨今のシラバスに要求される画一的な講義要綱の書式は、学問の画一性、つまり学問の平板化をもたらし、授業に参加するすべての人間による新たな知の探索を拒むものである。形式合理性の拡大によって実質的には非合理を招くことになる。」

「最近のシラバス書式に示されるように、学ぶことや知ることを合理的に管理しようというシステムの欲望は、学問にある、まよい、多様、直観を縮減することを目指している、だとしたら、そのような欲望は是が非でも排すべきであることを、ゼミでは具体的に実践する。」

「このようなシラバスの厳密化は、文科省が主導するものだが、この形式は大学の成立当初から基本となった「講義」形式にこそ合致するが、それ以外の形式、とりわけ、文科省が何年も推奨してきた授業形態には合わない。文科省は矛盾しており、矛盾がある以上、論理的に破綻した当の指

時よとまれ、君は美しいか？

導に従う必要はない。」

「出席者の個性も分からない段階で、あたかも合理的な授業内容を書くことの方が、暴力である。」

成績評価 履修者全て最高点 (S) から始まり、そこから減点すべきことがあれば、下がる。ただ多くの場合は出席日数だけ (平常点) が減点ポイントになるので、授業に出席している学生が不合格をとるのは難しかったかもしれません。

試験 そもそも 2005 年を最後にペーパー試験は行っていないのですが、試験を行っていた時も、問題作成を学生に託したりするのは当たり前でした。また授業の初回によく言っていたのは「次回の授業で期末試験を行い、合格者はその後の授業参加を免除してもいいと思う。皆さんの希望で決めたい」だったり、試験中に学生に向けて「なぜ皆さんは一人で答案しようとするのでしょうか。僕は隣の人と対話してはいけないとは言っていない」と語ったりと (実は語っただけでなく、ペアで答案を考えるように促し、同じ答案に二人の名前を書いてもらった。) とにかく、その場にいる学生が無自覚に持ち込んでくる制度的な規範を裏返そうとしてきました。このようなことをしていると 35 年の歳月の中で「これでは努力している私が報われない」というクレームをいう学生もいましたが、僕からは「全員が最高評価であることは何が問題なのでしょう。僕はその人の努力の多寡を評価できるわけではありません」と返してきました。GPA などなかった時代の話ですが。

卒業論文 慶應義塾大学文学部では卒業論文の要件は特段設定されていない。まして卒業必修単位は卒業試験であって、形式的には、卒業論文でもって卒業試験に代えるということになっています。岡原ゼミでは

2002年度からアートベース・リサーチを主たる活動に入れ込んだので、卒論としていわゆる学術論文以外の提出物を広範に認めてきました。映像作品、小説、サウンドアルバム、アートプロジェクト、アートブック、サイト構築、デザインポートフォリオ、写真集、パフォーマンス記録集など、制作日誌や企画書とともに学生には提出してもらいました。今は昔ですが、学生部が卒論を直接に学生から受け取っていた時代では、数枚の文書と添付資料（論文提出の制度にあつては、小説を除くと先の作品群は添付資料としか認められず）を出そうとする僕のゼミ生は、これは卒論ですか？と学生部の職員に詰問されたそうです。

そして最後にゼミについて 講義要綱、シラバス、開設時のゼミホームページなどに書かれた言葉を抜粋しておきましょう。大学のアーカイブのおかげで改めての記載ができます。で、かなり「やんちゃです」ね。ちなみに社会的なアクションを行う場合、ゼミでは対外的には teamOka を看板にしています。

ホームページから（2002～2010）

社会学を脱臼させること、それに尽きる。リアルな感覚からすれば金魚の糞のごとき「学」を壊滅的な状況に追い込み、そんな「学」を栽培してきた薄汚れてブヨブヨになった温室のビニールを引き剥がすこと、そこに、魂と生の喜びを求める。……誰が？ 誰に向けて？ 誰のために？

担当者のオカハラが言うには、「自然のものだと思われているような〈感情〉や〈身体〉の社会的構築を謳う、あるいは〈障害者〉の自立生活に立ち会う、それらをベースにして、ひと、もの、ことば、そして出来事が、この社会で配置される場面を僕は探ってきたのですが、今現在は、それらのいわゆる〈社会学的〉な営みにあつて、〈探る主体〉として制度的に構築されていってしまった〈僕〉〈岡原〉〈社会学者〉の脱・再構築をめざし

時よとまれ、君は美しいか？

で、みずからのリアルさに準拠するような、実験的な試みをしようとしています。たとえば、感情公共性の立ち上げ、非言語式社会学の創案、社会／学／アートもしくはソシオインスタレーションの制作、社会調査の演劇的批判、極私的 sociology の創作、などがそれです。またそれらの試みの総称として《社会彫刻》を、ドイツのアーティスト、ヨーゼフ・ボイスより借用しています」、ということらしい。

感情社会学、ポスト構造主義、ポストコロニアリズム、文化精神医学、ジェンダー論や差別論、さらには現代アートの動向、そんなことを頭に入れておかなければ、このゼミの輪郭はつかめない。けれど輪郭をつかんでも仕様がな。サブゼミを除けば、ろくに本も読まず、カメラやビデオやスプレー、あるいはターンテーブルで勝負しようとするからである。このバトル、白黒つけても仕様がな。まずはストリート、そこでのサバイバルが緊急課題だから。

個々の学生の多様な欲望を決めつけたり死なせたりしないよう、むしろ踏ん返り返った「学」こそ、敵にしましょう。ただ、逆に言えば、このゼミに参加するには強い欲望こそ必要かもしれません。自分のやりたいこと試したいこと、たとえそれが XXX だとしても、それをプロジェクトとして表現し、共にあるメンバーにそれを納得してもらい、どこからか経済的・社会的な資本を調達し、具体的に転がしていく。ネットワークやコミュニケーションを誘発・誘導し、自省しつつも、内に閉ざさず、つねに他者の前にみずからを投げ出し、他者のリアクションをリアルに受け止め、それをプロジェクトの本体に滑り込ませる。ときにプロジェクトは思わぬ変態を遂げ、予想外の出来事の連鎖となる、それをも楽しみ、その変態に身を寄せ、「自分が生きる」という生のプロジェクトの糧とする。それは「欲望」あつての話だから。

ゼミ活動には「形式」を求めません。その都度の欲望が互いに絡み合うなか、時間や空間、社交や関係、言説や身体、運動や実践、そういった形

式がアドホックに生成されるのを好むからです。ゼミメンバーの「所属」も問いません。欲望が所属に先行するからです。

シラバスから

〈team Oka〉による実験的社会プロジェクトあるいは社会彫刻の実践です。ゼミのWEB, を参考してください。今年度は「パフォーマンスアート」「映像社会学」、海外の美術祭、カルチュラルタイフーンなどの学会、学内では三田祭やヒヨシエイジへの参加も予定されています。

さて、このスペースは、この「講義要綱」にあって特異ではないでしょうか。というのは、今年度の「研究会」すなわちゼミを履修する学生はすでに選抜を経て、決定済みだからです。その時点で授業の内容もすでに大方は知られてあります。つまり、履修するはずの学生にとっては、このスペースの説明内容は全く冗長ですし読まなくても構わないものでしょう。さらに、この要綱は新学期が始まってからの緊急事態に対応できる印刷物でもありません。だから「研究会」については、この要綱、履修にあたっての情動的な価値はまさにゼロだとしか言いようがありません。だとしたら、なぜこの部分が書かれるのでしょうか。僕は、こう思うのです。このスペースに置かれる言説は、「社会学研究会」を現に履修する者に対してではなく、研究会を「履修しない者」に対して、向けられているのです。この逆説…。たしかに、それぞれの研究会が順次説明されることによって、研究会どうしの「差異」に基づく、個々の研究会ひいては担当教員の「意味」が効果として提出されることはあるかもしれません。とはいえ、この逆説、ストレートに考えましょう。「履修しない」とは、時間化すれば、「未だ履修しない」ということであり、そこには、将来的な履修可能性を担った学生、たとえば二年生が含まれます。だとしたら、いたって簡単、このスペースは今年度の講義要綱にあるにもかかわらず、実質、来年度以降の講義要綱だということです。つまり一年先の予告編。そしてもうひと

時よとまれ、君は美しいか？

つ。履修しないには、「決して履修しない」が含まれるでしょう。その人たちにこのスペースが向けられれば、それは呼びかけ、示威行為あるいは煽動ではないでしょうか。僕も、この後者の意味で、偶然ここに目を留めたあなたに、呼びかけたいと思います。もしあなたが、感情・身体、アート・パフォーマンス、セクシュアリティ・ライフスタイル、差別・社会的不平等に、自分の魂を震わせるなら、「既存の」「まっとうな」「常識的な」生き方に嘔吐するなら、「権威ある」「正当化された」「善良な」ことがらを「とにかく・取り敢えず・まずは、壊してみたい」と欲するなら、僕を研究室（225号）に訪ねてください。何か方策を一緒に考えてみましょう。（他のヴァージョンが『哲学』138に記載されています）。

こんな感じですので、多くの部門長や学生部の職員の皆さんを困らせてきたかもしれません。そして自分が大学院社会学研究科委員長や通信教育課程副部長などを務めることになれば、このルーティン破壊は加速していたと思います。社研委員長としても、共に執行部をお願いした先生方（梅田さん、皆川さん、真壁さん、今井さん、杉浦さん）とともに色々な改革を4年弱で進めてしまいました。主なものでも、院生への学会出張助成や海外留学奨学金、入試における研究計画に関する提出書類の充実、博論審査のプロセスに予備審査の過程を加える、プロジェクト科目の再生（これについては社会学研究科紀要に詳細を書いています）、中国からの留学生に向けた授業設置など、そしてこれは僕の意思というよりたまたまですが、研究科の日常業務を一変させた大きな変化つまりコロナ禍に起因する会議オンライン化およびバーバーレス化の促進も進みました。細かい規則や慣習については、その必要性が本当に確認されない限り、ズルズルと緩めてしまい、「それでいいんじゃない」という顛末も多かったかもしれません。

学術書、学術雑誌への制度批判の実践についても触れておきましょう。

『ホモ・アフェクトス』という 1998 年公刊の書物は、およそ、学術書なる制度への批判のパフォーマンスそのものです。修士論文の扉に具体詩を付して「言葉」という制度の多様な可能性を極限まで縮減する学術文書の狭隘さを表現したのに続きます。仕掛けは多種多様で、そのいくつかを挙げましょう。全体の構成がロジカルではなく、ミュージシャンの制作するアルバムのような効果狙いです。37 章つまり 37 本の作品ですが、それぞれの見出しはといえば、36 は「参考文献一覧」、37 が「索引、および人名・事項案内」、これらは通常の学術書であれば本文の外にありますが、あくまで本文と同じ位置づけとし、さらには人名索引にはおそらく誰も見当がつかないだろう僕の友人の名もあります。《痕跡》という 21 は写真とキャプションのみ、5「感謝の気持ち」で述べたのは、学術書の体裁では本文の前後に著書の個人的謝意が記載されることで、本文自体には著書の主観的でパーソナルな要素がないかのように振る舞われるということ。7「芝居小屋の侮蔑」では、例証的に他分野（僕の場合はドイツで学んできた演劇学や演劇体験）を引き合いに出す論述が、実は著者の差別化実践でしかなく本論を理解しやすいものになっているわけではないということ。2《作品》では先に紹介した修論本体に付した具体詩の再制作。3「ファックオフ」、私の 14 歳時の自作の厭世かつ皮肉な詩を紹介しつつ、その作者の心や感情に読者は届くのだろうかという問いを立てている。8《一九八六》、学術的であることへの価値をほぼ全面的に廃棄するように僕に迫った事件が語られる。このような次第で、そもそも感情社会学者である自分への再帰的な振り返りと批判なので、相互に入り組み、数段後での自己矛盾も厭わない内容、構成、表現となっていました。「感情社会的に自己表現する」というサブタイトルが示すとおりです。

2014 年公刊の『感情を生きる』でも「この企て、つまり社会学するという行為自体の制度的改変をもくろむ試み」として自らの「生と感情の社会学」「パフォーマティブ社会学」を位置づけているように、社会学という名

時よとまれ、君は美しいか？

の下に行われている社会的行為を総じて批判し別様に誘うことをミッションにしていました。次からあげるような学生との社会学のアクションも同様です。

3. teamOka のアクション

文学部社会学専攻のゼミですが、他専攻、他学部、他大学の学生も毎年必ずいました。哲学、倫理学、美学・美術史、日本史、西洋史、東洋史、民俗学考古学、国文、英米文、中文、仏文、独文、図書情、心理、教育、人間科学、つまり文学部の全専攻からです。学部でいえば、医学、薬学、看護医療を除く塾の全学部から、早稲田大学、武蔵野美術大学の学生も在籍したことがあります。学年も全てから受け入れました（公式の履修ができない場合でも）。

それでは teamOka さらには ABR を大学院研究科で展開する場として立ち上げた Keio ABR の一連のアクションについて走馬灯の如くに紹介して行こうと思います。

社会学的なアートプロジェクト（ドイツのアーティスト、ボイスから「社会彫刻」を借用）の実践をテーマにした 2002 年度ゼミが開始される少し前に代官山のアートフロントギャラリーより岡原ゼミに展覧会への参加が打診されました。驚きです。関東の建築系美術系の大学ゼミ 38 チームが参加する千葉県でのコミュニティ・デザインを目指すアート企画でした。菜の花里美発見展（アートユニバーシアード）と称されるイベントは、当時アートプロジェクトを邁進させていた北川フラムさんが、都市整備公団や東急不動産を後ろ盾にして均一的なニュータウンへの刺激を学生たちの個性から掘り起こすものでした。

実は 2000 年第一回越後妻有アートトリエンナーレの公募展に「通り過ぎて、とどまって」というタイトルの作品プロポーザルを私は出して、その縁で北川フラムさんからのお声かけだろうと思いますが、参加大

学で唯一の非建築・非アート系の人文社会学系のゼミとして、岡原ゼミは 100 万円の活動費を得て、地域の方々に向けた（T シャツ、DJ、人型着色の）ワークショップやクラブ設営やキャンプを約三ヶ月の期間にかなりの頻度で実施しました。「アートファミレス」「クラブおゆみの」というイベント名でゼミ生は思う存分にアートプロジェクトを展開することができました。

社会彫刻やるぞ、とか言っても何も基盤のないゼミにとっては、まさにそれが天の恵みでした。そしてそれがその後のゼミ活動のダイナモになったことは確かでした。2003 年に早稲田大学で第一回が開催されたカルチュラルタイフーンでは、「感情 T シャツワークショップ」のほかに、大隈講堂前での無許可ライブペイントのパフォーマンスも、ゼミ生と武蔵野美術大学の学生との共同で行われました。講堂前にシートやテントを張り、T シャツ数枚で体を覆う学生へのペイントを大音響の中で実施できたのです。そんな学生の活動に自由を与えている早稲田（その警備員）には感服しました。

このワークショップは私の専門分野である感情社会学、その社会実装実践の一つでした。2003 年京都女子大で行われた日本現象学・社会科学会のシンポジウムでは、私はパネリストとして「感情 T シャツの行方一知・感情・ワークショップ」という報告で、この T シャツワークショップは社会学たり得るか、という問いを会場に発しました。すでに ABR 的な思想を私は強く持っていました。この視点が実を結ぶのは『アート・ライフ・社会学』と『アートベース・リサーチ・ハンドブック』になります。ABR の学問的の制度への批判的立ち位置は多くの場で語っているので、ここはこれでやめにしましょう。

2004 年静岡県立大で開催された第一回障害学会でもゼミはワークショップを開催しています。とにかく学会に新たな息吹をとという使命感です。もちろん、障害というテーマは私の専門分野でもあります。学術

時よとまれ、君は美しいか？



写真1 『アート・ライフ・社会学』



写真2 『アートベース・リサーチ・ハンドブック』日本語訳

的な活動よりもアクティビストでありたかったのは確かです。ですから、障害者の性や恋愛をテーマに活動する NPO 法人ノアールと連携して歌舞伎町や大久保にあるイベントハウスのロフトを会場にしてのトークイベントを、岡原ゼミは 2003～2008 まで定期的に開催し、セックスボランティア、障害者の恋愛、障害者のオムツのデザイン、障害者の自助具などをテーマにしてゲスト（茂木健一郎さんや河合香織さんリリーフランキーさん、映画監督の佐々木誠さんなど）を交えての飲み食いしながらの議論の場を運営してきました。どれもゼミ生主体のイベント・プロダクションでした。この流れでプレジャートイ（大人のおもちゃ）の大手 TENGA さんからは、プロモーションビデオの作成がゼミに依頼されるようにもなり 10 本近い映画を 100 本近いテングの寄贈をベースにゼミでは送り出すことになりました。そういえばゼミの映像制作への熱は半端なく、2017 年から 2019 年にかけて長野県小諸市にて「こもろ映画祭」とい



写真3 第1回こもろ映画祭（参加大学学生や小諸市の方々、小泉小諸市長とゼミ生たち）

イベントを小諸市と協力して運営し、関東圏の大学サークルやゼミを募って、小諸の住民と一緒に劇映画の制作をしました。コロナ禍による中止になるまで毎年のゼミ生の活躍は私の想像を超えていました。参照は小諸市広報（<https://www.city.komoro.lg.jp/soshikikarasagasu/somubu/kikakuka/1/3/3/komoroeigasai/2271.html>）。

『生の技法』以来、障害学が私の分野の一つだとはされてきましたが、立岩真也さんのアクションに甘えて、僕は一貫して「障害とセックス、恋愛」をテーマに発言してきたと言えます。それに関わる執筆はメディアでもかなり多く、NHK クローズアップ現代+にも出演し、退職間際にも、オンライン TENGGA、西日本新聞で、障害とセックスについて持論を展開しています。

セックスといえば、teamOka のもう一つの代名詞 K-dom についても話しましょう。こちらも多くのメディアに取材されたゼミ活動であって、

時よとまれ、君は美しいか？



写真4 NHK クローズアップ現代+ 特集「障害者の恋と性」

言うまでもなく、慶應 × コンドームの K-dom です。2003 年と 2009 年に別途に行った企画で、個装コンドームのパッケージを学生がデザインし、販売、配布を行いました。2003 年のテーマはセクシュアル・マイノリティと HIV で、当時都内 HIV 治療の拠点だった都立駒込病院の医療スタッフを招いての学習会ののち、三種類のデザインで 3,000 個の K-dom が製作され、三田祭で約 2,000 個を販売しました。2009 年は、学生は身近で起きた予期せぬ妊娠をテーマにして、学内で質問紙調査を実施し、予想外の数で、予期せぬ妊娠と中絶を塾生が経験していることへの問題提起として 9 種類のデザインが作成されました。こちらは企業の協力で 10,000 個が無償で製作され、関連イベントなどでの無料配布を継続して行うことになりました。

他方、学生の発案で「慶應義塾大学芸術学部」プロジェクトも 2010 年から進められ、日本のパフォーマンスアートの第一人者である霜田誠二さんと teamOka も繋がることになりました。霜田さんが定期的にも実施しているニバフ（日本パフォーマンスアート・フェスティバル）やニバフアジ



写真5 K-dom パッケージデザイン Ver.2

ア、ニパゲン（日本パフォーマンスアートの現代）にゼミ生が参加し、自
 ずと私自身もスタッフやアーティストとして関わるようになりました。広
 島、神戸、釜山、光州で霜田さんと共にゼミがパフォーマンスのツアーを
 実行しました。

アートベース・リサーチ実践という目論見で、かなりの数のパフォー
 マンス作品を生み出してもいます。2018年にはマドリードで毎年行われる
 パフォーマンスアートイベント Acción!MAD に霜田さんほか6人の日本
 のアーティストの1人として私も招待されました。「黒と白」という40分
 ほどの作品で、二元論による世界の構築性をイラストレイトする中で二元
 論ゆえの殉教とテロというアクションを加えたパフォーマンスを披露しま
 した。

個人のパフォーマンスとしては、2021年東京藝術大学大学院国際芸術
 創造研究科主催の A/R/P (Art/Research/Practice) という国際シンポジウムの

時よとまれ、君は美しいか？



写真6 光州ビエンナーレでの teamOka パフォーマンス（霜田誠二さんと）

基調講演を任せられ、ABRに関する講演と「感情の考古学」というパフォーマンスを行いました。それは戦後世代の私に身体化された戦争体験にまつわる感情を探る試みで、戦争記憶のパフォーマンスシリーズ「戦争体験者としての私・岡原正幸」として沖縄、ウィーンという場所でも制作されました。teamOkaのパフォーマンス・ユニットであるH/Fについては後ほど触れますが、私自身は、学部生だった頃から、カプローのハプニングス、ボイスの社会彫刻に魅せられ、オットー・ミュールやヘルマン・ニーチェの行為芸術に引き寄せられ、学部卒業前に、演劇部の友人に、三田キャンパスの建物を「赤く塗る」パフォーマンスをしようと持ちかけたくらいです。霜田さんとの出会いは至高の幸運でした。

この文章を書いている最中も、2024年10月には、「慶應義塾大学名誉教授を買う」というパフォーマンスを、キャンパス近くに旧三田図書館を改修して開館する「みなとコモンズ」のオープニングバザーで行います。このパフォーマンスは2017年阿佐ヶ谷TAVギャラリーで観客を入れて「展



写真7 Art/Research/Practice 東京藝術大学主催シンポジウムでのレクチャー・パフォーマンス

示・慶應義塾大学文学部岡原研究会」というパフォーマンス、つまりギャラリー内でゼミを上演する（行う）というものにアカデミズム批判の点では近いのですが、来場者に最低賃金で慶應名誉教授を雇ってもらい、購入者が指示する行為を名誉教授すなわち私が行うものです。

さらに同じ10月、西麻布にある Wall alternative でも『MEET YOUR ART FESTIVAL 2024「NEW ERA」』のサテライト企画「FAYM2024」でパフォーマンスとトークを行いました。私が好む素材である粘着テープを存分に使って、空間を作り替え、参加者を文字通り繋ぐものでした。さらにパフォーマンス・オートエスノグラフィ実践として、澤田唯人君、映像作家の小田浩之君と共同で、2025年2月に開催される International Symposium on Autoethnography and Narrative 2025 (ISAN2025) に「オートエスノグラフィとしてのインタビュー行為 私とわたしとワタシ」という映像報告を行う予定です。

H/F というゼミのパフォーマンス・ユニットは、ハイスありな君を中心にして学部ゼミ生で構成されるチームで、ドイツ語で「聴く」「感じる」

時よとまれ、君は美しいか？

の頭文字を取ったユニット名です。2017年にはドイツのミュンスターやカッセル、2018年には南相馬や双葉町、韓国光州などに、パフォーマンス制作のためのフィールドワークや、現地でのゲリラ的な上演活動を行ってきました。学会でも、日本社会学会（東京大学）、カルチュラルタイフーン（龍谷大学）でパフォーマンスを披露しています。またメンバーを変えながらヴェネチア、ハンブルクにも遠征しています。2017年の作品は、戦争記憶に関するもので広島にある被爆体験のアーカイブに保存されている文章を、各地（教会前の広場、繁華街、ドクメンタ会場内のある作品の中でなど）で朗読することを中心にパフォーマンスは行われ、被爆体験を聞いて感じるこの意味を考えさせるものです。私はこの実践を目の当たりにして戦争体験の継承は戦争から縁遠い世代にも可能であると実感しています。

あるゼミ生の「太平洋戦争アーカイブズ」という試みもそのテーマに繋がります。土屋大輔君は、慶應義塾の戦没者遺族の聞き取りをする中で、岡原ゼミでは馴染みのTシャツに戦没者の氏名を記入し、その50着のT



写真8 H/F ドイツ・ツアー ハイスありな作によるポスター発表（カルチュラルタイフーン 2019）

シャツをゼミ生や私や院生をはじめ多くの塾生が着て人体ライブの記念碑にするという企画を実行しました。Tシャツに記された亡くなった家族の名前を遺族の方々が発見し、指でその名をなぞるとき、死者を思い、悼むという気持ちは、そのTシャツを着た学生たち（学徒出陣で亡くなった戦没者の後輩たち）の身体にも届くのでした。

『黒板とワイン』という共著の本があります。三田の家。慶應義塾の制服を提供してきた三田の望月洋品店が半ば倉庫がわりに使ってきた昭和の二階建て家屋を、私を含め4名の教員が廉価で賃貸し、学生と一緒に内装や家具を新調し、何にでも利用できる空間として、2006年～2013年の間、地元商店街と共に運営をしました。教室と居酒屋の間を目指した、居間と台所（生ビールのサーバーとワインを常備）とガレージだけの空間です。私の研究・教育のポリシーが活かされた代表的な場です。慶應義塾の社会地域連携の端緒として数えられ、港区と塾の包括連携を実現させた原動

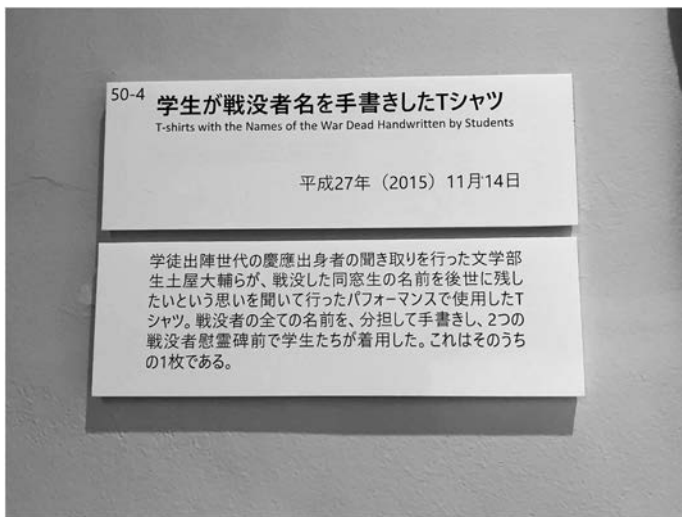


写真9 「慶應義塾と戦争」展キャプション 慶應義塾史展示館 2024

時よとまれ、君は美しいか？

力でありましたが、まずは、大学キャンパスを出ることで大学街を復活させ、多様な文化の拠点にすべく三田の家は構想されました。しかし、明確な目標が共有されていたわけではなく、設立に関わった私たち教員の面々はそれぞれ別の語り口をしてきました。でもただ一点「何もない」ということだけで一致するのです。そんな場に放り込まれる学生たちは、最初は戸惑いもあったでしょうが、徐々に正体を現し、その何もない空間に自分なりの充填をしてくれました。その中身を開陳するには場所も時間もありませんので、一つ、アカデミアに真っ向から対峙したオルタナティブ社会学会という三田の家で開催された「学会」について語ります。

2013年秋、慶應義塾大学が30年ぶりに日本社会学会の開催校になりました。文学部社会学専攻の教員である私は、開催校の代表として東大本郷で行われる会議に顔を出します。あるセッションの申し込みが否決されました。セックスワークに関するセッション企画でした。はて？ ということで、では三田の家で、同時期に学会を企画し、このセッションをやりたいと思いました。申請を拒否された研究者にコンタクトを取ると大歓迎。ABR系の実践報告も、本家の社会学会には当時は出しようもない形式（2017年の社会学会ではテーマセッションでABRを立て映像上映のみの報告もできるようになりました）、それらアート系も集めて、オルタナティブ社会学会を打ち上げよう。この提案に多くの方が賛同してくれて、三日にわたりそれも朝から晩まで、飲食を交えての大シンポジウムとなりました。プログラムの一部をお知らせしましょう。



写真 10 三田の家 HP のフロントページ（2024 年から一般社団法人三田の家に衣替え）



写真 11 オルタナティブ社会学会 2013 年日本社会学会大会（慶應義塾大学）と同時並行で実施

時よとまれ、君は美しいか？

「パフォーマンス社会学」「映画 生の技法」上演「学知のなかの表現、表現という参与」（NPO サーベイ 岩館豊さん、稲津秀樹さん、松尾浩一さん、小倉康嗣さんほか）「水商売ワーカーがみた性と恋愛」（三橋順子さん、中田梓音さん、松田さおりさん、鹿野由行さん、川畑智子さん）「アップノーマライゼーション 障害と性風俗」（熊篠義彦さん、山本翔さんほか）「革命のためのダンスワークショップ」（NORA BRIGADE）「ダメ連 再考/採光/再興」（神長恒一さん、ペペ長谷川さんほか）など、私自身は日本社会学会の大会運営委員とオルタナティブ社会学会の主催者で超大変でしたが、日本社会学会開催中の三田キャンパスで *Nora Brigade* というバンドと専修大の後藤吉彦さんのサクセスと一緒にゲリラ的に歌い踊り回ったのは、僕の三田史上最高の思い出かもしれません。

オルタナ社会学会のコアにあるアート系表現による社会学的実践、つまりは *ABR* ですが、2015 年には大学院社会学研究科を土台にする *Keio ABR* を設立し、本格的に *ABR* を大学院学生と共に進めます。共著論文や学会でのセッションと共に、実地の *ABR* 実践も多くあります。『特集アートベース社会学へ』（2017）や『アート・ライフ・社会学』（2020）は中間報告的な集大成です。中国、フランス、ドイツ、スペイン、エストニア、イタリアからの大学院留学生とも *ABR* 実践をしました。ここでは地域に向かった二つの活動を紹介します。後藤一樹君を中心にして行われた「牛久きおくうた」「牛久暖簾プロジェクト」、千葉県市原市にある上総牛久商店街での店主のオーラルストーリーを数日にわたり取材し、現地の現況や歴史を調査し、音楽家の河崎純さんとともにサウンドパフォーマンスとして作品化、日本演劇学会（日吉）、カルチュラルスタディーズ学会（早稲田大）、*Keio ABR* フェスにて公演しました。その後、商店街からの呼びかけで「牛久暖簾」の作成を行います。店主の顔写真とそのライフから作成された詩が大判のポスターとなり、店を飾りました。

「*kotobuki action*」, ゼミ生の高橋茉莉君の呼びかけで学生 16 名が横浜市



写真 12 牛久暖簾プロジェクト、こがねや店主

寿町にて夜のパトロール（食料品、衣料品などの配布ボランティア）に隔週で参加し、夏のお盆時期には、日吉教養センターが寿町に立ち上げた「かどべや」にて、地域住民を集めての一芸発表と懇親の会を開催しました。寿町という場に肩肘張らずに入り込む塾生を見て頼もしく思ったものですが、イベントのプロデュースはアートプロジェクトとして十二分な ABR 実践になることも確認しました。

皆さんの中には、学生のこういった活動にはそれなりの資金が必要だろうと思われたでしょう。学生の海外渡航、国内出張、備品や消耗品の購入など、学内の経常的な予算や私自身の研究費を使うだけでは毛頭足りませんでした。そこに救世主、つまり福澤先生が現れます。慶應義塾創立 150 年の寄付を土台にした未来先導基金が立ち上がります。そこには、教員が申請して塾生の学びを豊かにする公募プログラムなる制度もできました。制度批判などしている場合ではありませんね。早速、応募したわけです。

時よとまれ、君は美しいか？



写真 13 Kotobuki action

そして、三田の家では2008年から5年間継続して採択され(合計1,200万円)、SKCでは2017年より3年連続で採択され(合計600万円)ました。義塾への恩義は忘れられません。というか、塾生がスパークするための基金でしたので、目論見通りの支出を行なわせていただいたと豪語します笑

プログラム名「三田の家：21世紀的學生街の創出に向けて」で資金援助を受けた三田の家(当初は家の家賃を設立に携わった教員が分担)に関してはすでに触れましたので、「慶應SKC計画」というプログラムについて少し触れましょう。SKC(Super Knowledge Campus)とは、大学キャンパスで流通する知識や情報とは異なり、自分の身体と感情、交渉や依頼といったコミュニケーション、他者とともに、他者を想像しながら培う「知

識を超える知」が開発されるキャンパスという意味です。牛久も寿町も小諸も H/F 海外遠征などもこの資金によって塾生の活動が賄われました。

無目的を敢えて標榜した三田の家も、この SKC も、Self-Education, Self-Empowerment, Self-Respect, 「自ら知り、自らをエンパワーし、自らをリスペクトする」、塾の信条である独立自尊、半学半教、自我作古ともつながり、自分たちで発案したものを、他者とともに学びながら実現していくことで、最終的には、自分自身への自信を高め、ともに行動した他者への敬意も深くすることになりました。既成の「学問とは」「大学とは」「ゼミとは」「社会学とは」といった制度的規範もしくはクリシェーに囚われることなく、ただただ自分たちの欲望を全開することで発想されるアクションのなせる技でした。

塾生の欲望を押し止めないこと、それはこの国の教育制度への批判でもあります。生徒や学生を未熟な無知な一律的な存在とすることで、効率的な教授が施されるとし、一定水準の学力へと導こうとする教育実践は嫌いです。思えば、この 40 年以上、それに抗ってきたのです。

社研委員長時代から関わっている JST 次世代研究者挑戦的研究プログラムである Keio Spring（未来社会のグランドデザインを描く博士人材の育成 2021～、未来のコモンセンスをつくる博士人材の育成 2024～）で次世代研究者育成の専門委員を退職後も続けています。塾の 14 研究科の博士院生にアート系実践やフィールドワーク実践をコアプログラムとして企画し提供しているのですが、それは、ABR 的な感性が分野別の専門知を横に繋げ、あらゆる研究に表現という契機を設定することで、若手研究者が社会へと創造的に開かれるのを助けると信じているからです。同じく JST に採択された早稲田大学や東京大学のプログラムと比べると、私たちの異色さは際立っています。実用的なプログラムを揃える他大とは異なり、短期的には自分の研究に役立たないはずのアクションに敢えて挑戦する舞台です。慶應でも僕のような発想をドンキホーテ的に進める人は多くはないはず、で

時よとまれ、君は美しいか？



写真 14 Keio Spring コアプログラム Art/Design/Communication での中学同級生・千住博氏との対談

も、そんな提案に面白いじゃないかと言ってくれる他の研究科委員長や塾執行部があつてのプランです。新しいものへの「好奇心に基づくゆるさ」が塾の文化ですね、福澤先生！ <https://doctoral-support.keio.ac.jp/spring/>

2023 年から開始された慶應義塾大学クラウドファンディングで 4,645,000 円の寄付を得て成立したプロジェクト「あなたのライフを作品にする 人文社会学系研究によるエンパワー」では、ライフストーリーの ABR 実践というゴールがありますが、同時に、研究という活動そのものをちょうど学部や大学院のゼミ生と共に行ってきた様式で、つまり専門家という枠から引き剥がし、誰でも行いえる活動の一つにしたいという目的もあります。公開社会学と読んでいます。あるいは三田の家がそうだったように、社会学という行為をすることで「コモンズ」を生み出そうとしています。20 人近い方々が一緒になって自分のライフを素材にして、

寄付金控除型 #チャレンジ #子ども・教育 #医療・福祉 #災害 #映画・映像 #舞台・パフォーマンス #東日本大震災 #寄付金控除型 #介護 #大学 #研究

あなたのライフを作品にする～人文社会学系研究によるエンパワー

高原正幸 (慶應義塾大学名誉教授) / Keio ABR

ご協力ありがとうございます！
あなたのシェアで499人がプロジェクトを
見られました。

寄付総額
4,645,000円 目標金額 4,000,000円

寄付者 募集終了日
283人 2023年7月31日

<https://readyfor.jp/projects/...> コピー

集まったお金を使うと、あなたのシェアによってこのプロジェクトに何人か助けている方が増えます

Facebook X LINE note

写真 15 慶應義塾大学クラウドファンディング 2023～2025

映画、演劇、詩、インスタレーションなど、オートエスノグラフィックなアート系作品制作を行います。私自身のライフをテーマにした映画制作も進行中です。その成果は 2025 年秋に Keio ABR の創立 10 年に合わせて、“大展覧会”として公開される予定です。 <https://readyfor.jp/projects/keioabr>

大学というアカデミアの制度をここまで批判して、あれやこれやとやってきたとなれば、残るは、大学制度とは関係なく、大学内部で実践してきた多様なアクションを持続的に行うしかありません。ちょうど良いことに私は定年退職となりました。そしてなんとそのために、塾生や塾員が 180 名も集い、「一般社団法人岡原ゼミ」を立ち上げてしまいました。ここで紹介してきた数々の活動の進化形を今後も多様に実践していきます（正直、忙しいですが笑）。

<https://www.okazemi.website/>

時よとまれ、君は美しいか？

4. おわかれに

長年、慶應義塾の大学教員として生きてきて、最後に一つだけ、改めてお話ししておきたいことがあります。ここで紹介してきた活動は研究活動として（予算費目上）推進されつつも、まずもって学生と一緒に進めてきた「学び」であり「教育」であったことです。「科学者共同体」といった少数のコミュニティでの評価を求めることよりも、慶應義塾で出会った何千人もの人々（通学部ゼミ・卒論指導で500名超、通信課程ゼミ・卒論指導で300名超、通信授業で1,300名、そして「現代社会論」「生の社会学」「映像社会学」「感情社会学」などのワークショップ授業で出会った学生たち数千名）との具体的な学びの場をもてたことを幸せに思っています。創発的な教育実践などと声高に言わなくても、価値ある意義を学生の皆さんとの付き合いで実感してきました。きっと、彼らの行動全てに魅せられ恋をしていたのかもしれない。

教育といっても一方通行的なものではなく、ここまで紹介してきた数々のアクション、そのほとんどが、むしろ学生の声と発案であり、僕からの提案というより、彼らの声を聞いていたら、たまたまこうなった、というのが正しいでしょう。だから僕に取り立てて独自性はない、強いて言えば、目の前にいる学生の独自性（欲望）を殺さないように、そういった独自性（欲望）を否定する制度的言説「大学とは～、学問とは～、社会学とは～、授業とは～、,、あるべき」に疑問を投げかけ、「全然OK、それでいこう、やってみよう」と調子良く、無責任に、東宝映画のクレイジーキャッツの如く、振る舞っていただけかもしれません。蟻の一穴になるべく道化のパフォーマンスです。

アーティストの西尾美成さん（編著 2024『美術は教育』現代企画室）は教育にアートプロジェクトを取り入れ「学生や市民が日頃の違和感や気づきから思考を深め、それを論文ではない方法で表現すること」で「豊かな学びの共有空間＝祝福の瞬間を生み出してきた」と言います。そして学

生と教員が「ともに学び、ともに自由になる」と述べています。まさに、そうなのです。

三田の家では成人のみ入場可の「三田秘宝館」、大隈講堂前でも国際アート展の会場でも勝手にゲリラ・パフォーマンス、三田の交差点に屋台を引いてきて適当なところでランチ会、中庭で寝袋のなかで寝てみたり、中庭で暴れ回るプロレスをしたり、渋谷では環境問題を訴えるデモをゼミがしたり、小諸市の民家の庭で穴を掘ったり、花火師でありシンセサイザーの作曲家でもあるゼミ生の井口琢磨君は、その二つを同時に叶えたいという欲望で、学生部や東急や日吉商店街を説得してヒヨシエイジというイベントを立ち上げました（彼はこの「業績」で塾長賞をいただきました）。他にも数えきれない発案とプロジェクトが私から言わせてもらえれば「ともに学び、ともに自由になる」出来事でした。

アカデミズムは、研究あるいは作家の作品制作（芸術系）という次元とは異なるものとして、かつそれらの下に「教育実践」というものを置きがちです。下と言うのは文字通りですが、教育なき研究はあっても、研究なき教育はないという大学教員の考えなどはその代表例でしょう。「教育業務が自分の研究にとって負担」という大学教員の嘆き、特別研究休暇や留学派遣なども、教育業務の免除として存在しています（僕は2014年留学先のハンブルクでも卒論指導をして、学生向け講演会を対面とオンラインでやりました）。理系ではバイアウトも進行中で、「優れた」研究者が授業を代行させることも可能になっています。

しかしながら、慶應義塾には、いつも、教育こそ第一と唱える先生方がいました。もちろん研究活動も欠かさず、各分野での評価も高いそれらの先輩方を、私は見てきました。彼らの学生に対する情熱は、学生への無限愛のような気もします。それらの先生方の顔を思い浮かべながら、今、これを書いています。

次々に大学という場所を去っていく卒業生たち、それら学生とは別に研

時よとまれ、君は美しいか？

究が実体として存在し続けるという体裁でもって、アカデミアは生き続けています。しかし、教育は作品かもしれない、というアーティスト（美大教員）がいるように、個別の特定の学生たちと私たち教員の間での多種多様な姿をとるその都度の相互行為自体が研究成果であるとしたら、そのことを認めた上でのアカデミアの再構築も必要なはずでしょう。時をとめてはならない。アカデミアを去る学生とともに、流れ去る時があるだけなので、その時をとめてしまっ、あたかも完成したモノだけを研究業績にして、その美を愛でてはならないのです。ここでその一部が紹介されたアクションもモノではありません。流れ去るなかで、流れ去ったその都度のアクションの連なりのなかで、その美が担保されているのです。

今回寄稿をお願いした面々、後藤一樹くん、澤田唯人くん、土屋大輔くん、ハイスありな君、他にも共同で授業を行ってきた高山真くん、中村香住くん、鈴木弥香子くん、鳥越信吾くん、Keio ABR ラボを担ってくれた大学院生のみんな。彼らそれぞれと出会って作り上げてきた研究・教育実践は流体として、私だけでなく彼らの生にも担保されていればいいと思う、それはそれで教員という立場で人と出会う身としては至上の喜びです。ありがとう！

三田社会学会会長だった時に、李さんとともに「青池先生と山岸先生を悼む あの頃の三田社会学」というシンポジウムを実施しました。思えば、こんなにまで法外な私の言動を許してくれた先生方への感謝の念も改めて感じます。横山寧夫先生、山岸健先生、荻野恒一先生、藤田弘夫先生、挙げ始めたらキリがありませんね。大学院時代からのピアグループ（好井裕明さん、石川准さん、桜井洋さん、立岩真也さん、草柳千早さん、吉沢夏子さん、永田えり子さん、儘田徹さん、井上良介さんら、やや年下の澤井敦さん、鈴木智之さん、木田邦治さん、梅屋潔さん、浦野茂さんなど）も僕の議論と酒に付き合ってくれました。さらに、途方もない思いつきに形を与えたり、ダメ出しをくれたり、細部にわたり協力してくれた職員の



写真 16 三田社会学会大会シンポジウム（李さんと）

皆さん（高橋さん，五藤さん，宮下さん，岸さん，黒田さんなど，学部・研究科の秘書の皆さん，特に先導基金でエキストラにお世話になった小川さんら），そして何より，40年近い教員生活で僕につき合ってくれた学生のみんな，感謝の言葉がありません。

定年退職の前日まで社会学研究科委員長を務めていたので，ホームである文学部社会学専攻の皆さんには最後まで迷惑をおかけしました，岡田あおいさん，三尾裕子さん，李光鎬さん，近森高明さん，杉浦淳吉さん，樫尾直樹さん，木下衆さん，本当にありがとうございました！そして私の後任であり盟友である小倉康嗣さんが三田哲学会の幹事ということでこの特集の編集をしてくれること，もろもろ感無量です。

学生の皆さんが僕の語りから「心に沁みる名言」シリーズを退職後にSNSで発信してくれました。その中から一つ，全然，大丈夫！

時よとまれ、君は美しいか？



写真 17 インスタ岡ゼミ会 (https://www.instagram.com/okahara_185804/)

あとがき

ABR 実践を長い年月にわたり大学・大学院にて授業として行うことができたのは、快く授業に手を貸してくれたアーティストの方々のおかげです。一部になりますが、お名前を挙げて感謝の気持ちを示したく思います。霜田誠二さん、小泉明郎さん、柏木陽さん、関根淳子さん、関根信一さん、佐々木英子さん、石野由香里さん、小田浩之さん、佐々木誠さん、千住博さん、望月六郎さん、橋本有子さん、北山聖子さん、濱田明李さん、ケイン樹里安さん、Sonia Hedstrand さん、Gonzalo Rabanal さん、松本准平さん、リリーフランキーさん、槌本紘子さん、Bartolome Ferrando さん、岡原功祐さん、パク・ジュヨンさん、門脇幸さん、村山浩さん、Lilly さん、新井麻弓さん、佐藤朋子さん、河崎純さん、二河茉莉香さん。

この他にも、非常に多くのアート系実践家を単発のゲスト講師として招

いてきました。そして、その原資の一つが三田哲学会（講演会補助事業）ということも、謝意とともにお知らせしておきます。

さて、今回の特集号には僕の研究室から他にも寄稿者がいました。私からは「岡原」あるいは「岡原ラボ」について書いて欲しいという（通常の退職記念号のように各自の専門分野を記すのではない）願いをしたため土壇場で断念したメンバーがいます。「どうしても書けない」というその声の切実さは、なにか僕のラボの特徴を語ってくれているようでもありましたし、「ゆるさ」から何かを産んできた Keio ABR そのもののような気がします。

最後の最後ですが、盟友ともいえる、加藤文俊さん、毛利嘉孝さん、小松佳代子さん、熊篠慶彦さんにも感謝の言葉がありません（これは付け足しではありません、気恥ずかしいので末尾というわけです）。学問制度への挑戦、今もその同志であると信じています。

書籍など

『生の技法 家と施設を出て暮らす障害者の社会学』（安積純子、立岩真也、尾中文哉、との共著）藤原書店 生活書院（文庫版）1990年、2010年

『ホモ・アフェクトス 感情社会的に自己表現する』世界思想社 1998年
「感じたことを素直に出そう」『アートユニバーシアード 菜の花里美発見展』（北川フラム監修）現代企画室 2003年

「work-shopping@waseda-karada」『文化の実践、文化の研究』（伊藤淳編）せりか書房 2004年

『黒板とワイン もう一つの学びの場「三田の家」』（熊倉敬聡、望月良一、長田進、坂倉杏介、手塚千鶴子、武山政直との共著）慶應義塾大学出版会 2010年

『感情資本主義に生まれて 感情と身体の新たな地平を模索して』慶應義

時よとまれ、君は美しいか？

塾大学出版会 2013年

『感情を生きる パフォーマティブ社会学へ』慶應義塾大学出版会

2014年

『哲学 アートベース社会学へ』『哲学』138集 三田哲学会 2017年

『アート・ライフ・社会学 エンパワーするアートベース・リサーチ』晃洋

書房 2020年

“Arts-Based Research Practices in Sociology: Undergraduate and Graduate Degree Education” (with Alena Prusakova)

Arts-Based Methods in Education Research in Japan. K. Komatsu. K.Takagi and T.Okada (eds) Brill. 2022年

“Don’t Be Afraid to Be Performative!: Doing Performative Social Science at Keio University in Tokyo, Japan”

Doing Performative Social Science : Creativity in Doing Research and Reaching Communities. Kip Jones (ed) Routledge. 2022年

「出会いと迷い 質的な研究, というより, ただ人間的で主観的なものの

探究」『社会学的質的調査の挑戦』有末賢・小倉康嗣・松尾浩一編著

図書出版みぎわ 2025年

“Personal Reflections on 10 Years of Arts-Based Research Practice in Japan”
Handbook of Arts-Based Research. 2nd.edition P.Leavy (ed.) Guilford

2025年

「ケアと演劇」『演劇事典』日本演劇学会編 丸善出版 2025年

雑誌など

「パフォーマティブ社会学宣言」『NIPAF2013 カタログ』2013年

「障害者の自立を考える—社会学の視点から」 岡原正幸・立岩真也『地域
域リハビリテーション』8巻4号 三輪書店 2013年

「障害者の性を考える—社会学の視点から」 岡原正幸・立岩真也『地域

- リハビリテーション』8巻5号 三輪書店 2013年
- 「パフォーマティブな現実の中で ライブ一元論」『ARTLET』44号慶應義塾大学アートセンター 2015年
- 「このいま、想像力の圧倒的な欠如」『現代思想』10月号 青土社 2016年
- 「アートベース・リサーチ 社会学としての位置づけ」(高山真・澤田唯人・土屋大輔との共著)『三田社会学』21号三田社会学会 2016年
- 「アートベース・リサーチ なぞる・癒す・パフォーマンス」『法学研究』90号 2017年
- 「アートベース社会学へ」『哲学 アートベース社会学へ』第138号 2017年
- 「アートベース・リサーチ 上演と身体」『哲学 アートベース社会学へ』第138号 2017年
- 「アートベース社会学の実践史」『哲学 アートベース社会学へ』第138号 2017年
- 「演劇と教養 アートベースリサーチと演劇」『演劇学論集』65号 日本演劇学会 2017年
- 「相模原市津久井やまゆり園殺傷事件を振り返る」『立教社会福祉研究』37号 2018年
- 「慶應 SKC 計画 学びと研究の転回」『三田評論』1232号 2019年
- 「Keio ABR の活動実践について 社会学研究科におけるアートベース・リサーチ」『社会学研究科紀要』91号 2021年
- 「プロジェクト A という授業 研究コミュニティ形成の触媒」『社会学研究科紀要』94号 2022年
- 「あこのころの三田社会学」『三田社会学』27号 2022年
- 「プロジェクト JST という授業 アート・デザイン・コミュニケーションによる研究科横断コミュニティの形成」『社会学研究科紀要』95号 2023年

時よとまれ、君は美しいか？

「アート・デザイン・コミュニケーションを身体化する場 KeioSpring コ
アプログラムの記録」(共著 加藤文俊, 山口徹, 本間友, 小泉明郎,
小田浩之)『The KeMCo Review』1 2023年

「身体障がいがある方の性生活・恋愛事情に関する調査 障がい学・感情
社会学の視点から解説」『月刊 TENGGA』47 2023年

アート作品 (ABR 実践, 講演, ワークショップ企画)・共同研究・社会地
域連携活動など

「VIP volunteer initiation program 活動」1991-1992年株式会社オムロン (企
業市民室)からの委託研究, 報告書提出 1992年 (金子郁容, 立岩
真也, 尾中文哉, 安積純子ならびに編集工学研究所による共同プロ
ジェクト)

「ネットワーク CI のプロデュース」1992年度卒業生を中心にしたアク
ションプログラム, 勉強会, 合宿および講演会・シンポジウム開催
1992~1994 共同運営

「通り過ぎて、とどまって passed, stayed」越後妻有アートトリエンナー
レ 2000 応募作品プラン 1999年

「アートユニバーシアード 菜の花里美発見展」(主催アートフロントギャ
ラリー, 都市整備公団, 千葉県)

岡原研究会として招聘され, 約半年間, 千葉県内でアートワークショッ
プ実施 2002/4~9

「妻有夢花火 みんなの想いを打ち上げます」(岡原・井口琢磨共同提案)
越後妻有アートトリエンナーレ 2006 応募作品プラン 2003年

「work-shopping@waseda-karada」第1回カルチュラルタイフーン 2003 (早
稲田大学) パフォーマンスとワークショップ 2003/6

「this/able/workshop@disability/studies/shizuoka」第1回障害学会大会 (静岡
県立大学) ワークショップ 2004/6

「ヒヨシエイジ」「日吉フェスタ」（慶應大学日吉キャンパス） 大学と地域連携の枠組みで、第二回ヒヨシエイジ以降毎回参加，キャンパスおよび日吉台小学校でアートワークショップ実施

2004, 2005, 2006, 2007, 2008, 2009, 2010, 2011 年

「三田の家」（芝 5 丁目）の開設と共同運営 2006/4～2013/12 三田の家
関連イベント企画多数

オルタナティブ社会学会（日本社会学会大会慶應義塾大学と並行して実施）
下記参照 2013/10/11.12.13

慶應義塾創立 150 年記念未来先導基金公募プログラム 「「三田の家」：21 世紀的学生街の創出に向けて」

2008/4～2013/3（5 年連続採択）

「mita/no/ie@send/aida」カルチュラルタイフーン 2008（せんだいメディアテーク）ワークショップ 2008/6

「芝地区昭和の地域力再発見事業」（芝 3 丁目「芝の家」開設と運営 港区および三田の家 LLP） 2008/9～

港区と慶應義塾との連携に関する包括協定，2008 10/4 に調印

「ご近所イノベーション養成講座」 KGRI 2012- 校長ほか

「障害とアート」NPO ノアール主催，岡原研究会共催コンテスト 映像部門審査員 2009

大学教育 GP「身体知教育を通して行う教養言語力育成～慶應義塾「語力」開発のモデル提示と実施～」慶應義塾大学 教養研究センター 共同研究員（アートによる身体と大学教育）2009～2011

「身体詩 跳べ，障害とセクシュアリティ」「Kizuna & Kusari」パフォーマンス作品 カルチュラルタイフーン 2011 神戸大会 グループパフォーマンスとビデオ 2011/7

「生の技法」「私へ～喘息児として」パフォーマンス作品 『ニパゲン（パフォーマンスアートの現代）』明大前キドアイラックホール

時よとまれ、君は美しいか？

2012/6/20.21

「身体詩 BoDy (be or die) Politics/Poetics」「2003 へのオマージュ」パフォーマンス作品 カルチュラルタイフーン 2012 広島大会 グループパフォーマンス 2012/7

「Ars Vivendi」パフォーマンス作品 『ニパフ（日本パフォーマンスアートフェスティバル）』 3331 Arts Chiyoda 2013/6/25

「Performance art in Korea」グループパフォーマンス・ツアー 光州ビエンナーレ会場内 2012/9 釜山ビエンナーレ会場玄関 2012/9

「私へ2」パフォーマンス作品 『風の声が聞こえない』（グループ展）三田の家 2-13/7/13

「Finnegans Wake オルタナティブ社会学会」総合企画製作、運営、パネリスト 三田の家 2013/10/11～13

Day1

「クロストーク 人が集うこと、インフォショップの可能性」（後藤吉彦、川邊雄ほか）

Day2

「パフォーマンス社会学」「映画 生の技法」上演

「学知のなかの表現、表現という参与」（NPO サーベイ 岩館豊、稲津秀樹、松尾浩一、小倉康嗣ほか）

「セックスにまつわるお仕事からのオノマトペ」（宮階真紀ほか）

「水商売ワーカーがみた性と恋愛」（三橋順子、中田梓音、松田さおり、鹿野由行、川畑智子）

「アブノーマライゼーション 障害と性風俗」（熊篠義彦、山本翔ほか）

「革命のためのダンスワークショップ」（NORA BRIGADE）

「ダメ連 再考/採光/再興」（神長恒一、ペペ長谷川ほか）

Day3

- 「ビジュアルな方法、パフォーマンス的な方法」(後藤範章, 岡原)
「君はあまちゃん? なんてたってアイドルグループって何?」(塚
田修一, 星野貴彦, 高艸賢ほか)
「エッチなお姉さんのリレーションシップ 全米セックスワーカー会議
報告, 社会的資源としてのセックスワーカーの価値」(水嶋かおりん
ほか)
「三田の家葬送 自律的空間の技法」(井本由紀, 堀口佐知子, 岡原ほか)

「alternatives」パフォーマンス作品 『ニパゲン』明大前キドアイラック
ホール 2013/12/9

Keio ABR 設立 2015/11/3 Keio ABR 主催イベント 多数

Keio ABR Festival 2017, 2018, 2019, 2025

「書く, 記録する」「Tape and Pencil」「Blutbad」パフォーマンス作品 公開
発表会 ノグチルーム 2016/1/14 ほか

「alternatives」パフォーマンス作品 『ニパフ 2016』3331Arts Chiyoda
2016/3/2

「Wrapping」パフォーマンス作品 『ニパフ 2016』長野市 2016/3/9

「Private Room」デュオパフォーマンス (坪井聡志・岡原正幸) 『ニパ
ゲン』3331Arts Chiyoda 2016/5/30

「10の小品 牛久きおくうた」(作品提案書 後藤一樹・坪井聡志・高山
真・プルサコワありな・岡原正幸・河崎純) ICHIHARA ART ×
MIX2017 公募展 2016/5

「Encounter +/- Confusion」パフォーマンス作品 『ニパフアジア 2016』
3331Arts Chiyoda 2016/7/28

「IDENTITY VS NOISE: 1Dn A sound installation by Lloyd Cole」Nexus Arts
(Adelaide), TAVGallery (Tokyo), Long Room Hub (Trinity College Dublin),
The Museum of Finnish Architecture (Helsinki) Keio ABR 共同プロジェ

時よとまれ、君は美しいか？

クト 2017/1/25-2/3

「パフォーマンス・オートエスノグラフィ」レクチャーパフォーマンス（岡原）2017/1/31

「展示・慶應義塾大学文学部岡原研究会」上演 岡原ゼミ 2017/2/3

以上3件、Keio ABR TAV シリーズ「サイトスペシフィックと社会学」

TAV ギャラリー（阿佐ヶ谷）2017/1/25-2/3

「親子で対話の可能性を開く～演劇ワークショップを用いたコミュニケーショントレーニング」七沢希望の丘初等学校 ワークショップ企画・実施 2017/2/4

慶應義塾創立150年記念未来先導基金公募プログラム「慶應 SKC 計画」
2017, 18, 19 3年連続採択

「H/F1」

ミュンスター市内（Skulptur Projekte 会期中 教会・広場）2017/8

「H/F2」

カッセル市内（Documenta 会場および市内中心広場）2017/9

「H/F1+2」

学会でのパフォーマンス 日本社会学会大会 東京大学本郷キャンパス
2017/11/4

「H/F3」

福島県南相馬市、双葉町他 2018/2

「H/F3-1」

学会でのパフォーマンス カルチュラルタイフーン龍谷大 龍谷大学大宮キャンパス 2018/6/23, 24

「H/F4」

ハンブルク KZ Neuengamme 2018/8

「H/F5」

光州 光州事件 光州ビエンナーレ会場 2018/9

〔H/F6〕

沖縄県 2019/1

〔H/F7〕

ヴェネツィア Biennale 会場 2019/9

〔H/F8〕

名古屋市 愛知トリエンナーレ会場 2019/10

〔H/F9〕

ベルリン コロナ禍で中止 2020/3

〔こもろ映画祭〕

長野県小諸市との地域連携 岡原研究会主催・小諸市共催による関東圏大学生対象の映画祭（のべ 12 大学が参加，小諸で市民とともに制作された映画を市民が審査する），記者会見および各メディア報道あり

第一回 2017 年 8～10 月

第二回 2018 年 8～10 月

第三回 2019 年 8～10 月

第四回 2020 年 コロナ禍で中止

〔Schwarz/Weiss〕 パフォーマンス作品 『ACCION! MAD18』 XV Encuentro de Arte en Acción Naves Matadero Madrid 2018/11/1-3

〔World Cafe〕 パフォーマンス作品 アトリエ第 Q 芸術 2019/3/11

〔World Cafe2〕 パフォーマンス作品 3331Arts Chiyoda 2020/3/1-2

〔Archeology of Emotions〕（パフォーマンス）「ABR/RBA/感情の考古学」（基調講演とパフォーマンス）

国際シンポジウム Art/Research/Practice 東京芸術大学 2021/10/1

「朗読パフォーマンス」（オンライン・パフォーマンス） 「パフォーマ

時よとまれ、君は美しいか？

ンス・オートエスノグラフィとして「パフォーマンス社会学へ」内パ
フォーマンス 第 94 回日本社会学会大会 東京都立大学オンライン開催
2021/11/14

Keio Spring Art/Design/Communication コアプログラム 2022 年度～継
続中 企画・運営・講師

「ドキュメンタリー映画制作ワークショップ」(岡原+小田浩之)

「パフォーマンスアート・ワークショップ」(岡原+霜田誠二)

「三田を歴史する フィールドワーク」(文研 山口徹)

「強くないデザイン・ワークショップ 尾中俊介」(本間友)

「痕跡と自分のあいだ:SEA と現代美術家のワークショップ 山田健二」
(本間友)

「岩渕町フィールドワーク」(加藤文俊)

「東日本大震災・原子力災害伝承館、双葉町フィールドワーク」(岡原+高
山真)

「VR と医療 ワークショップ 椿玲子, ゴッドスコピーオン, 遠迫憲英」
(岡原+小泉明郎)

「生成 AI を利用してリサーチプロジェクトを編む」(岡原+中島琢郎)

「応用演劇ワークショップ」(岡原+柏木陽)

「南三陸と気仙沼を巡る」(岡原+小田+ハイスほか)

協生カフェ(協生環境推進室)ワーキンググループ 学生公募企画コンペ主
催 関連ワークショップ企画 東館ラボ, 芝の家 2022/11/5, 26, 12/17

「戦争体験者としての《私・岡原正幸》シリーズ」(パフォーマンス連作)

「沖繩にふれる」パフォーマンス作品 那覇市奥武山公園, 糸満港および平
和祈念公園 2022/3

「NS Wien にふれる」パフォーマンス作品 ウィーン市内 ファシズム弾圧

被害者の碑, ショアの祈念碑 2023/2

「あなたのライフを作品にする」 慶應義塾クラウドファンディング 465

万円寄付達成・プロジェクト成立

2023/8～2025/11

「慶應義塾大学名誉教授を買う」 パフォーマンス作品 みなと commons

2024/10/12

「赤い無題」 パフォーマンス作品 Wall alternatives 2024/10/18

一般社団法人岡原ゼミ設立 2025